

## 論語における人間観察法

公益委員 末永 睦男

その以ってする所を視、

その由る所を觀、

その安んずる所を察すれば、

人焉いづくんぞかく度さんや、人焉いづくんぞかく度さんや 「論語（卷一第二為政篇10）」

これは、「論語」で孔子が説いている人間観察法であり、私はこの名言を座右の銘としているので、今回はこれを紹介したい。

いくつかの中国古典では人間観察法を採り上げているが、それは現実には信頼できない人間もいることを認め、それなりに用心をしてじっくりと見極めて対応することを勧めているものである。

では、孔子の場合、どこで人を見るべきだと云っているのでしょうか。

基本的には手がかりは3つあるという。

まず、第一に顔つきである。

あるとき、孔子のもとに若い男が入門を願い出て来た。見ると、なんとも云えない不細工な顔をしていた。孔子は一目見て、これは見込みがないと思ったらしいが、男の熱意にほだされて入門を許した。ところが、この男が後に見事な人物に成長して、諸侯に名を知られるようになった。

したがって、孔子は顔つきだけでは当てにならないと悔いたという（『「論語」再説』（加地伸行著、中央論社、2009年）110～111頁）。

第二に、発言である。

能弁でまくしたてる男がいた。はじめ孔子はその男の言うことを信用していたらしいが、やがて言うことと行いが一致しないことに気付いて、「あの男の言うことを信用しなかったばかりに、とんでもない見込み違いをしてしまった」と大変後悔したという（『「四書五経」の名言録』（守屋洋著、日本経済新聞出版社、2010年）246頁）。孔子は口先ばかりで実行の伴わない、口舌の徒を嫌った。立派な人は必ず言行が一致する。だから弟子の中では行動派の子路を特に愛した。論語にはこれに関する章が多く、「君子は言にげんにとつ訥にして、行おこないにびん敏ならんと欲す」、「巧言令色、鮮すくなし仁」、「徳ある

者は必ず言あり、言ある者は必ずしも徳あらず」等である（『続・声に出して活かしたい 論語 70』（三戸岡道夫編、栄光出版社、平成19年）10頁）。

孔子は発言も手がかりの一つではあるが、決め手にはならないと云っている。

第三に行動である。

人前でどんないい格好をしようが、日頃の行動や経歴、またその信条や信念を観察すれば、その人がどんな生き方をしているかは自然と判るものである。人々の前で一時だけ自分を取り繕っても、すぐばれてしまうものだ、日頃の行動や考え方が何より大切だと、上記の名言は論している（『続・声に出して活かしたい論語 70』16頁）。

私は、弁護士という職業柄、いろんな職種、年齢、性格の人に日々接しているが、その人物の信用性を確かめる必要に迫られることが多い。そのとき常にこの名言を思い出し、人間観察法に活かしている。つまり、人の信用度を見極めるには、その顔つきや見かけではなく、また、能弁であるか否かではなく、その人（とりわけ40代以上の人について）のかねての行動や経歴、信条は何なのかということに常に留意することにして

いる。

皆さんもこれを参考にされたらどうであろうか。